

土曜
ASHUREY CLASS

原文で味わう詩篇

תהלים

No.17 (詩篇24篇) 2025. 1. 11

「詩篇」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】ヨハネの福音書5章39～40節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

※イエシュアは私たちに聖書を正しく解釈することを教えています。それはイエシュアという鍵を入れ込むことで、初めて言わんとすることが見えてくるということです。詩篇もそのように、預言的、奥義的、重層的に読んでいきたいと思えます。

※詩篇の作者ダビデは本体であるイエシュアを証ししています。なぜなら、御子イエシュアはダビデの先取的存在だからです。

「詩篇」を学ぶ上で大切な視点

● 詩篇全体の序文である1篇と2篇に、イエシュアが証しされていることをACで学んでいます。「人となられたイエシュア」と「天の務めをされているシーム・イエシュア」です。

● 1篇1節「アシュレー・ハーイーシュ: $\psi\text{אֱלֹהֵינוּ \psi\text{אֱלֹהֵינוּ}$ 」の「**その人**」にイエシュアが証しされています。「その人」が2篇12節では「バル: בָּר 」の「**子**」(=御子・初穂)に言い換えられています。7節の主の定めでは「**あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ**」と語られています。

● 1篇の「**幸いなことよ、その人(単数)**」が、2篇では「**幸いなことよ、すべて主(原文は「彼」)に身を避ける人(複数)は**」(アシュレー・コル・ホーセー・ヴォー: $\text{בְּרָצוֹן הַיְהוָה} \psi\text{אֱלֹהֵינוּ}$)となっています。

1. テキスト ①

【新改訳2017】詩篇24篇 <ダビデによる。賛歌。>

1 地とそこに満ちているもの 世界とその中に住んでいるもの それは主のもの。

2 主が 海に地の基を据え 川の上に それを堅く立てられたからだ。

3 だれが 主の山に登り得るのか。だれが 聖なる御前に立てるのか。

4 手がきよく 心の澄んだ人 そのたましいをむなしいものに向けず
偽りの誓いをしない人。

5 その人は 主から祝福を受け 自分の救いの神から義を受ける。

6 これこそヤコブの一族。神を求める者たち
あなたの御顔を慕い求める人々である。セラ

7 門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

8 栄光の王とは だれか。強く 力ある主。 戦いに 力ある主。

9 門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

10 栄光の王それはだれか。万軍の主この方こそ栄光の王。セラ

1. テキスト ①

【新改訳2017】詩篇24篇 <ダビデによる。賛歌。>

- 1 地とそこに満ちているもの **世界**とその中に住んでいるもの それは主のもの。
- 2 主が **海**に地の基を据え **川**の上に それを堅く立てられたからだ。
- 3 だれが 主の山に登り得るのか。だれが 聖なる御前に立てるのか。
- 4 手がきよく 心の澄んだ**人** そのたましいをむなしいものに向けず
偽りの誓いをしない**人**。
- 5 **その人**は 主から祝福を受け 自分の救いの神から義を受ける。
- 6 これこそヤコブの一族。神を求める者たち
あなたの御顔を慕い求める人々である。セラ
- 7 門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。**栄光の王**が入って来られる。
- 8 **栄光の王**とは だれか。強く 力ある主。 戦いに 力ある主。
- 9 門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。**栄光の王**が入って来られる。
- 10 **栄光の王**それはだれか。 **万軍の主** この方こそ**栄光の王**。セラ

2. テキストの観察 ①

● 3～6節までを除いて観察してみましょう。

1 地とそこに満ちているもの 世界とその中に住んでいるもの それは主のもの。

2 主が 海に地の基を据え 川の上に それを堅く立てられたからだ。

7 門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

8 栄光の王とは だれか。強く 力ある主。 戦いに 力ある主。

9 門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

10 栄光の王それはだれか。万軍の主 この方こそ栄光の王。セラ

● 24篇に「栄光の王」(メレフ・ハッカーヴォード：מֶלֶךְ הַכְּבוֹד)という語彙が5回も見られます。これは聖書でこの箇所しかありませんが、再臨のメシアの称号です。

● 「地」(エレツ：אֶרֶץ)、 「世界」(テーヴェール：עוֹלָם)、 「万軍の主」(アドナイ・ツェヴァーオート：יְהוָה צְבָאוֹת)。「万軍の主」の初出がIサムエル記1章3節に、「世界」は同2章のハンナの賛歌の8節にあります。神に敵対する大国が台頭してくる時代です。

2. テキストの観察 ②

- 2節を観察してみましょう。

主が 海に地の基を据え 川の上に それを堅く立てられたからだ。

- 「海」は「ヤツミーム：𐤆𐤊𐤍𐤏」で、創世記1章10節と同様「海」の複数形が使われています。これは神に敵対する諸国を表しています。また「川」も「ネハーロート：𐤍𐤇𐤓𐤏𐤕」で複数形です。これは創世記2章10節の「四つの川」を指し、その流れの中に、神に敵対する流れがあります。神はそうした「海」と「川」の上に地の基を据え(𐤆𐤊𐤍𐤏)、それを堅く立てられる(𐤏𐤊𐤍)ゆえに、1節の「地とそこに満ちているもの 世界とその中に住んでいるもの それは主のもの」と宣言されているのです。それは、再臨のメシアの主権によって、御国を実現されることを冒頭で語っているのです。

3. 「人称の確認」 ①

3 だれが 主の山に登り得るのか。だれが 聖なる御前に立てるのか。

4 手がきよく 心の澄んだ人 そのたましいをむなしいものに向けず
偽りの誓いをしない人。

5 その人は 主から祝福を受け 自分の救いの神から義を受ける。

●人称を確認するためには、原文を見る必要があります。3節の動詞の「登る」「立つ」の主語は「彼」です。4節の「心がきよい」「心の澄んだ」人、「そのたましいをむなしいものに向けない」「偽りの誓いをしない」人。また5節の「その人」も、すべてが3人称男性単数です。これは、詩篇1篇に見たように、そこに人となられたイエシュアが証しされています。そして、その「彼」が後半（7～10節）で「栄光の王」（新共同訳は「栄光に輝く王」）として現われるのです。

3. 「人称の確認」 ②

6 これこそヤコブの一族。神を求める者たち
あなたの御顔を慕い求める人々である。セラ

● 「これこそ」は代名詞の「ゼ：カ^ו」で、これは「主から祝福を受ける人」が「ヤコブの一族」の代表となることを示しています。「世代」を意味する単数の「ドール：ガ^ו」、つまり「神を求める人々」「神を尋ね求める人々」である「ヤコブの子孫」は、終わりの時代に登場する「イスラエルの残りの者」です。

① 「求める」は「ダーラシュ：ツ^וラ^ו」、② 「慕い求める」は「バーカシュ：ツ^וカ^ו」でいずれも渴望用語です。前者は理性的なのに対して、後者は心情的です。「シャーアル：ラ^וツ^ו」も「求める」で渴望用語ですが、共通しているのは「シーン：ツ^ו」の文字があることです。

4. 「山に登る者」 ①

- 少し戻って、3節にある問いかけに目を留めてみたいと思います。
「だれが 主の山に登り得るのか。だれが 聖なる御前に立てるのか。」
- 「主の山」とは「シオン」「エルサレム」のことです。そこに登るとい
うことは何を意味しているのでしょうか。「登る」と訳された動詞は「アー
ラー：**הלך**」です。登るという意味ですが、同時に「全焼のいけにえ」
(オーラー：**הלך**)として自分をささげることをも意味しています。次いで、
「聖所」に「立つ」とは何を意味しているのでしょうか。「立つ」は
「クーム」(**קום**)で「起き上がる、成就する」を意味します。したがって、
3節の問いかけは、「全焼のいけにえのささげものが神に受け入れられ、
かつ起き上がる者、つまり復活し得るものは誰か」です。この問いかけに
答えられる者は、やがて人となってこの世に遣わされるイエシュアの他に、
だれ一人としていないのです。その意味においてこの詩篇は預言的です。

4. 「山に登る者」 ②

●4 節の「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人」とは、「全焼のいけにえとして神に自らをささげることのできる者」と同義です。それは「手、心、たましい、口」のすべてが、神のみこころにかなっているからです。そのような者が神から祝福を受け、義を受けるのは当然のことです。

●しかもこの祝福は、彼を通して、主を求める者たち、御顔を慕い求めるヤコブの一族に与えられるのです。イエシュアはこの祝福をもたらすために来られたと言えます。

5. 「門と戸に対する呼びかけ」 ①

7 門よ おまえたちの頭を上げよ。

永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

8 栄光の王とは だれか。強く 力ある主。 戦いに 力ある主。

9 門よ おまえたちの頭を上げよ。

永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

10 栄光の王それはだれか。万軍の主この方こそ栄光の王。セラ

●8節と10節に交唱があります。「栄光の王とは だれか」の呼びかけに対して「強く 力ある主。戦いに力ある主」と応答します。ハルマゲドンの戦いで勝利するのは「万軍の主」です。初臨はろばで入場されましたが、再臨の主は白い馬に乗られ、必ずエルサレムの城壁の東から入られるのです。その門は「黄金の門」と呼ばれています。現在は完全にふさがれていますが、再臨の時にはその門から栄光の王が入場されるのです。

●ところで、「門」「戸」とはいったい誰のことだと思われませんか。

5. 「門と戸に対する呼びかけ」 ②

7 門よ おまえたちの頭を上げよ。

永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

●ここで「門」(シャル: 772)と「戸」(扉=ペタハ: 772)に対して「上がれ」と二度も命じられています。二度命じられているのは強調表現です。しかも、呼びかけられている「門」と「(永遠の)戸」はいずれも複数形です。つまり「おまえたちのかしらを上げよ」と言っています。ここでの「おまえたち」とは、反キリストが全世界からハルマゲドンに集めた軍勢だと考えます。彼らに対して、人称なき存在である聖霊は、悔い改めを迫っているのです。

●「上げよ」と命じる動詞は「ナーサー: 772」で「手を上げる、声を上げる、目を上げる」といった意味がありますが、それ以上に大切な意味は「赦す」です。彼らが「赦される」ためには、悔い改めて、神に立ち返ることが必要です。それ以外のことは求められていないのです。最後のチャンスなのです。

5. 「門と戸に対する呼びかけ」 ③

【新改訳2017】ゼカリヤ書14章16節

エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、**万軍の主である王**を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。

- 「門よ おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる」との呼びかけに応えて、悔い改め、生き残った者たちがいることを、ゼカリヤは預言しています。とすれば、彼らも朽ちるからだでメシア王国に入ることになります。